様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１３日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８　～２０１０
課題番号：２０５３０４５５
研究課題名（和文）　現代移民研究の分析課題と日本におけるナショナリティの変容

研究課題名（英文）　Analytical Problems of Migration Studies in the Age of Globalization and the Transformation of Nationality in Japan

研究代表者
伊豫谷　登士翁　（IYOTANI　TOSHIO）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：７０１２６２６７

研究成果の概要（和文）：本研究では移民研究が何を前提としてきたのかを再検討し、グローバル化時代に相応しい移民研究のあり方を再考することにある。これまでの移民研究は、国境を越えて移動する人びとを例外的な出来事としてとらえ、移動する人びとをいずれかの国家に定住させて、国家的な管理におく過程として展開してきた。しかしグローバル化の進むなかで、国家と国民とのズレが顕在化し、海外諸国では新しい移民研究の方向が模索されており、日本においても、社会的変化を見据えた移民研究が必要とされている。

研究成果の概要（英文）：
The present research examines the presuppositions of Migration Studies and attempts to rethink Migration Studies in a way appropriate to the era of globalization. Migration Studies has been envisioned up until the present as a discipline which regards people who migrate across national borders as an exception to the rule and it has considered these migrants as little more than the objects of state management. However, alongside the advancement of globalization, the gap between the state and national citizens has become ever more apparent and the need to seek out and develop a new kind of Migration Studies which takes account of these kinds of social transformations has been recognised both abroad and in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：移民研究・グローバリゼーション研究
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：移民・境界・場所・グローバリゼーション・ナショナリティ

１．研究開始当初の背景
非移民国を自認してきた第二次世界大戦後の日本では、移民研究は外国人労働者論としてスタートし、その受け入れの是非を巡って

論争が行われた。しかし、少子高齢化が政治ならびに社会問題化するなかで、移民の受け入れが議論されるようになり、移民問題として認識されるようになってきた。移民研究の側からは、外国人労働者の受け入れは、日本語学校や研修生制度をはじめとしてイレギュラーな移民政策として批判されてきた。また海外においては、人道的な観点からも、移民労働者の権利が保障されない政策に対する批判は高まってきた。さらに、少子高齢化社会におけるケアの問題などにおいて、看護労働者の受け入れなどを焦点として、ふたたび受け入れをめぐる議論が起こってきている。本研究の全体的な構想は、グローバリゼーションといわれる時代における人の移動を、いかなる枠組みのなかで捉えることができるのかを問うことにあり、これまでの移民研究の方法ならびに分析枠組を再検討するとともに、人の移動の観点から日本のナショナリティの変容を明らかにしようとするものである。とくにこれまでの移民研究が変えてきた大きな課題、すなわち移民研究そのものの政策研究への傾斜という点からの課題は看過されてきた。移民に対して国家がどのように対処しうるかをめぐっては、海外においても大きな論争点であり、とくにグローバリゼーションの時代において、国家は移民国家へと移行しつつあるという議論が提起されてきている。しかし日本の移民研究は、国家政策と現場である地方自治体とのジレンマに振り回されて、移民として受け入れた人びとへの対応や移民管理の技術的な政策を中心に行われ、移民研究としての理念や思想を問い直す試みは欠けており、そうした状況に対して、本研究は、移民研究の前提を問い直す試みとしてスタートした。

２．研究の目的

本研究の目的は、（１）ジェンダー研究やポストコロニアル研究などの新しい理論潮流を移民研究がいかに受け止めてきたのかを理論的に明らかにし、グローバル化の中での移民研究のあり方を再構成すること、そして（２）再構成した観点から現代の日本という場所をいかに捉え返すことができるのか、を海外研究者と共同研究で進めることにある。本研究を海外研究者との共同研究とする理由は次のような点にある。日本の移民にかかわる研究の多くは日本人研究者に限られてきた。しかし、近年、欧米をモデルとしてきた移民研究が日本を含むアジア系移民へと関心を拡げ、また日本の資本主義やナショナリティの変容などと移民とのかかわりに関心を持つようになり、アジアを含む日本の移民に関心を寄せる海外研究者が増えてきている。こうした傾向は、ひとつには、欧米諸国での移民研究の課題が移民のアジア化という現象と関連する。しかし他方では、もはや日本の移民研究を日本人研究者の特権と考える時代ではなく、海外研究者との間に問題関心を共有し、共同研究を組織すべき時期に来ている。

移民研究は、政策や運動と密接に結びつきながら、政治的な立場をたえず問われ続けてきた。経済成長が移民労働者を不可避的に必要としながらも、安全保障や社会秩序の不安定要因として移民が取上げられ、現代の国家体制は「(リベラル)ジレンマを抱える移民国家」であると主張される。公式的であるかあるいは非公式であるかは別として、多文化主義や共生が政策として打ち出されながらも、ネオ・ナショナリズムといわれる文化的ナショナリティの表出は強化され、移民排斥の動きは、先進国と発展途上国を問わず、高まっている。経済的な相互依存の深化や文化的な相互浸透とともに、境界を揺るがすさまざまな事象が噴出し、人の移動にかかわる研究も、これまでの移民研究の枠においては処理しえない諸課題を抱えるようになり、新しい理論潮流が提起した問題を受け止めざるをえなくなってきた。エスニック研究やレイシズム研究あるいは地域研究、都市研究、ジェンダー研究さらには歴史学や文学批評など幅広い分野において、現代を捉えるキーワードのひとつとして人の移動が取り上げられている。しかし、これまでそれらさまざまな分野において行われてきた人の移動に関わる研究分野は、対象としての共通性あるいは近似性にもかかわらず、相互に対話することなく行われてきた。どのような理論を背景に人の移動を取上げるかは問題の観点を規定し、課題そのものが問題の立て方のなかに埋め込まれる。これら諸研究から言えることは、新しい理論潮流の成果を移民研究としてどのように受け止めるかということであり、さらにグローバリゼーションといわれる時代において、移民研究が「国民国家」あるいはナショナルアイデンティティを所与としてきた問題性を問い直すことである。

本研究の目的は、制度化されてきた移民研究と呼ばれる分野が、これまでどのような課題を抱えてきており、グローバル化といわれてきた世界的な大きな変化のなかで研究のあり方がどのように変化しており、さらに日本において今後の移民研究をどのように進めることができるかを明らかにすることにある。移民研究(マイグレーション・スタディーズ)は、人びとがいずれかの国家に帰属し、定住していることを常態と考え、移動する人びとをそうした常態からの逸脱と捉え、人びとの常態への復帰過程として、研究されてき

た。しかしグローバル化と呼ばれる現代において、情報通信技術や交通手段の発達によって、こうした前提は大きく崩れてきており、国民と国家の暗黙の一致を所与とはできなくなっている。欧米諸国における移民研究は、こうした状況を踏まえて、シティズンシップ研究やディアスポラ研究など新たな展開を示してきた。本研究では、一方でのナショナリズムの高揚と他方での移民の多様化という世界的な状況のなかに、日本が抱える課題を位置づけるとともに、グローバリゼーション時代における人の移動に関わる研究のあり方を再考することにある。

３．研究の方法

（１）海外、とくにアメリカとオーストラリアの移民研究がなにを課題としてきているのかについて、移民に関わる国際会議に出席するとともに、最新の海外における研究動向を把握するために、海外研究者と交流を継続してきた。

（２）日本ならびに他のアジア諸国における移民の変化について、それらの比較研究を試みた。これら近隣諸国においては、状況はきわめて日本と近似しており、ある意味では日本以上にクリティカルに問題点が指摘されてきている。韓国や台湾・香港の状況を調査するとともに、これら諸国における研究者と意見交換を行った。

（３）前著『移動から場所を問う』の続編として、新しい移民研究にむけた研究会を組織し、定期的な研究会を開いてきた。多くの社会科学の諸分野において、人の移動への関心が高まっており、研究会では、人の移動に関心を持つ若手研究者を中心に、移民研究を開かれた研究領域として展開するための方法を模索してきた。

（４）研究成果を内外の学会やワークショップにおいて報告し、人の移動に関わる研究領域との交流を図ってきた。ただし、移民に関わる研究は、移民研究者に限定されるものではなく、むしろ移民研究を他の研究分野と広く接点を持つ問題群ととらえて、社会学あるいは移民研究だけでなく、アジア研究や日本研究を含めた地域研究、国際法や国際政治、歴史学など幅広い分野の研究者と接点を持つことができた。

４．研究成果

（１）欧米諸国ならびにオーストラリアなど、従来の移民国の多くにおいて、移民はますます多様になってきており、ナショナルな文化意識の高まりによって、移民規制が強化されてきている。しかしこうした状況は、対イスラムといった単純な形で捉えうるものではなく、階層やジェンダーなどが組み合わさって複雑な要因として現れてきており、さらに、状況そのものの変化の速度が著しく加速化していることがわかった。

（２）アジアの近隣諸国である台湾や韓国・香港は、日本と同じく、特定分野での労働力不足、少子高齢化によるケア労働力需要、国際結婚など、共通した課題を抱えており、ある意味では日本以上に深刻な問題となってきている。さらにトラフィキングを含めた人権問題として、これら諸国は国際的な非難に晒されており、世界経済の不安定な状況に対して、これら諸国の研究者は非常に敏感になっている。

（３）研究成果として計画している新著については、出版社も決定し、平成 23 年度中に出版予定である。本書の主要な課題は、日本における人の移動研究において看過されてきた重要な問題点を取りあげることにあり、現代移民の起点としていわゆる引き揚げや帰国事業を位置づけ、さらに戦争と移動、アイヌやジェンダー、監視を取りあげ、これらを通して人の移動に関わる新しい視点を打ち出すものである。

（４）海外の研究者との交流に関しては、アメリカならびに韓国でのシンポジウムへの参加、台湾でのワークショップの開催など国際的な発信は十分な成果を挙げた。また、移民研究者との交流では、サッセンを招聘するとともに、彼女の主著『グローバル・シティ』ならびに新著『領土・権威・諸権利』の翻訳などを通じて、グローバル化と人の移動に関わる彼女の新しい視点を紹介するとともに、ホリフィールドとは、国際会議によって「移民国家」という支店を拡充することについて議論を重ねた。また、日本研究との接点を拡げるために、定期的にオーストラリアとの交流も継続した。

（５）移民研究を開かれた研究領域にするために、「移動と文学」という研究会を立ち上げ、フィルムや文学などに現れた移民表象の問題をあつかうとともに、日本における「引き揚げ」と「帰国事業」という戦後直後の出来事が移民研究における原点であることを確認した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
① 伊豫谷　登士翁
グローバル化時代の“移動”と“場所”、世界　１１月号、査読無、2010 年、pp. 219-231

② 伊豫谷　登士翁
グローバル・シティの出現と移民労働者 POSSE　3、査読無、2009 年、pp. 149-160

③ 伊豫谷　登士翁
ナショナルなものとグローバリゼーション研究の課題、神奈川大学評論 59 巻、査読無、2008 年、 pp. 34-42

〔学会発表〕（計７件）
① 伊豫谷　登士翁
日本の越境移動研究と移民の現状、国際シポジウム「越境移動と漂流的記憶」、交通大学（台湾新竹）、2011 年 1 月 6 日

② 伊豫谷　登士翁
グローバルな空間と具体的な場所、日本社会学会(名古屋大学)、2010 年 11 月 7 日

③ 伊豫谷　登士翁
世界的規模の移民の時代とアジア／日本の人の移動―、東北大学・慶応大学共催「アジアにおける人の移動の『いま』と『これから』」、2010 年 10 月 9 日

④ IYOTANI　TOSHIO
Re-considering “Globalization and Asia” ,International Convention of Asia Scholars(ICAS)6,
韓国太田ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ,2009 年 8 月 6 日

⑤ IYOTANI　TOSHIO
On the Institutionalization and Transformation of the Social Sciences in Japan ,Transmission of Academic Values in Asian Studies, ANU(ｷｬﾝﾍﾞﾗ),2009 年 6 月 25 日

オーストラリア国立大学におけるシンポジウムでの報告に関して、
http://www.aust-neth.net/transmission_proceedings/
で公開。

〔図書〕（計２件）
① 伊豫谷　登士翁
グローバリゼーション研究と課題としてのジェンダー（ジェンダー史叢書７巻『人の移動、・文化の移動』所収）、明石書店、2011、pp. 295-312

② 伊豫谷　登士翁
「『グローバル・シティ』空間の射程」（『哲学・社会・環境』所収）日本経済評論社、2010、 pp. 101-129、

６．研究組織
(1)研究代表者
伊豫谷　登士翁（IYOTANI　TOSHIO）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：７０１２６２６７